

海の闘い

愛知県 鶴見 一義

私は昭和十七年の徴兵で、大竹海浜団に入団、きびしい新兵教育を受け、同十七年のくれ、新兵教育を終了した。みな各艦船に配属になり、私は巡洋艦「阿賀野」だった。乗船のため呉港から航空母艦に乗り、南方トラック島へ向け出航した。

約二週間ぐらいの長い航海であった。トラック島に無事入港。私の配属する軍艦「阿賀野」という最新型艦船の横に投じようされた。はじめてみる私の乗る船をおおぎ、感動と緊張でいっぱいであった。私の乗艦は夕暮であった。

呉港出港の時は十二月で雪が降っていたが、さすが南方は暑い。早速新兵の配隊が示され、私は第五分隊の魚雷部隊であった。

翌日から新兵教育で毎日の艦隊勤務が始まった。朝は

午前四時三十分、夜は休むのは十一時ごろで、また、その翌朝までの間に一時間の見張勤務があった。

毎日毎日のくりかえしであるが時々スコールがくる。

大きなスコールがくるときは手あきの全員に洗濯用意の号令があり、新兵はとくに上官の身のまわり品からさきに洗濯にかかり、その後自分の物を洗う。大変なことであった。スコールのあと、上甲板の水取り清掃は毎日であった。艦隊生活の毎日は、この世の地獄のように思われた。

だんだん戦火がきびしく、船隊はアツアツ島方面から南方にもどり、ニューギニア島方面の海戦に出撃した。その間われわれは各配置を守るのがせい一杯で他のことを思いうかべることはなにひとつなかった。

昭和十八年なかばごろ、南方作戦中、本艦は敵潜水艦の攻撃を受け沈没し救助された。私及び他の戦友は共に第五海軍病院（ラバウル）に入院した。

私は一命を取り戻し、明十九年一月二日退院し、ラバウル港を商船「山国丸」に便乗出港した。一月十四日夜半、航行中の船団に敵潜水艦の攻撃を受け、また沈没し

た。

私はまた幸いにして他の御用船に助けられ、無事横須賀港にはいった。救助された兵隊は一週間ほど横須賀海浜団に仮入隊し、各所属部隊に帰団することになった。我々呉所属は十人ほどであった。汽車に三日間乗り、はじめて皆気楽に話合い呉海浜団に全員無事到着し、帰団の報告をした。

私のおもな苦勞はとくに艦船中であった。その後、終戦までの苦勞も、一生忘れることはないと思う。

北の海の回顧録

愛知県 佐久間 千鶴夫

「駆逐艦薄雲に乗艦を命ず」昭和十七年五月二十日、横須賀田浦海軍水雷学校の卒業式のことであった。

いよいよ実戦部隊への配属に、心のときめきを覚えたものでありました。私は待望の帝国海軍の一人前の兵隊として、また、あこがれの駆逐艦乗りとして、国民の期

待を一身に受けたんだ、またその期待にこたえるんだ

と、心のなかに勝手にきめ、一人ひそかに万歳を叫んだ。心は、ときめき、胸踊らせ、勇躍舞鶴へと向かいました。

ところが、この駆逐艦「薄雲」は期待に反して、現在新装備をするためぎそう中で、まだまだ軍艦とはとてもいえないしろものであった。舞鶴海軍工廠の岸壁にせつがんされ、鉄びょう打ちのけたたましい音と、酸素溶接の青白い光のなか、即、戦力として戦列に加わるべく、日夜その整備をかさねているさい中であつた。

昭和十七年七月三十一日、第五艦隊（旗艦・巡洋艦「那智」）に編入、のちに昭和十八年四月一日付で第九駆逐隊編入となるが、昭和十七年八月五日、いよいよ待望の舞鶴港を出港して実戦配備につく日が来た。

日本海を進路北にとり「両舷前進ヨソロー」と、大湊港に向かって出港した。途中、艦の戦速測定検査等々多くの諸実験検査を実施し入港した。それは、昭和十七年八月十一日、北太平洋における特殊勤務につくための出港でした。

いよいよ昭和十七年八月十一日大湊を出撃し、勤務地